

補論 2. 縄文から弥生へ～晩期後葉土器群の変遷（予察）～

①はじめに

縄文時代の終末、そして弥生時代の開始という時代画期の解明は、全国的に見ると近年目覚ましい成果を得つつあると言える。殊にここ数年来は、以前資料的に恵まれなかった東日本において、豊富な知見が得られている。ところが房総においては、荒海貝塚を始めとする重要な遺跡を持ちながら、この問題についてこれまで殆ど踏み込むことができなかったと言って過言でない。尤も関東地方全般について見ても、弥生土器成立以外の諸相が充分明らかにされたとは言いが、房総では弥生土器の成立についてさえも論及することができなかった。その理由は簡単で、最古の弥生土器とされてきた須和田式土器と縄文時代晩期の土器を繋ぐ資料、須和田式土器の生成過程を示す資料の欠如が障害となっていたからに外ならない。

今回報告する内黒田遺跡群では、縄文時代晩期後葉から弥生時代中期の土器群が、複数地点から小期毎にまとまって出土するという良好な資料を得ることができた。また内黒田遺跡群とほぼ並行して調査された、近傍の物井地区御山遺跡¹の資料を加えると、概ね一貫した流れを追うことができる。加えて最近では県内各地で該期の資料の発見、報告例が増加している趨勢にある。ここでは内黒田遺跡群で得られた資料を中心としながら、他遺跡の資料も援用して、房総半島における縄文時代晩期後葉の土器群の変遷と、弥生土器成立に至る過程を追ってみたい。

②浮線文土器群の成立期

1980年代に入り、晩期後葉に中部から南東北にかけて盛行する所謂「浮線文土器群」の編年の整理が行われた。中部高地においては、松本盆地の遺跡で代表させれば、女鳥羽川段階⇒離山段階⇒トチガ原段階と編年され、離山段階を水Ⅰ式古段階、以下水Ⅰ式は中段階、新段階と細分された。また女鳥羽川段階が大洞C₂～A式、離山段階が大洞A式、水遺跡の主体部分である水Ⅰ式中段階以降が大洞A'式に対比された。この細分は設楽博己²の精緻な研究によってなされたもので、細部の相違はあったとしても、今日これを大きく否定する見解は出されていない。勿論晩期浮線文土器の研究は他にもなされているが、浮線文の型式学的研究に終始するものが多く、土器群の変遷が充分把握されるに至っていないので、ここでは設楽編年を示準として考えることにする。

浮線文土器群の第1段階、女鳥羽川段階に対比される良好な資料は未だ見られない。それは時期的に限定された一括性を持つ資料がないということであって、前浦期以前から継続的に存在する拠点遺跡においては前後の時期の資料に混じて報告されている。例えば大多喜町堀之内上の台遺跡³や銚子市余山貝塚⁴などの出土土器に含まれている。それらは横浜市杉田遺跡⁵・杉田D類土器の一部と共通した様相を持つ、口縁部が内湾あるいは内傾し、レンズ状付帯文を施文

する浅鉢により代表される。また松本市女鳥羽川遺跡⁶や辰野町樋口五反田遺跡⁷出土の浅鉢とも
きわめて共通性の高いものである。かかる浅鉢は前浦期の後半に出現する、杉田C類土器及び
茨城県桜川村殿内遺跡⁸・殿内BⅢ式土器の浅鉢から直接的に継起することは明らかである。し
かし房総ではいまのところそれらに組成する土器群が明確ではないし、豊富な資料を出土した
杉田遺跡でも、土器群の分離が充分でないと言える。

内黒田遺跡群周辺では該期の資料はなく、前段階では千代田遺跡群V区が前浦期の前半で断
絶している。前浦期で断絶する遺跡は多く、この事実はまた重要な問題を提起していよう。

③浮線文土器群の展開

離山段階、大洞A式後半に対比される土器群でまとまったものは、今回報告した池花南遺跡
出土資料である。池花南遺跡の土器群には多様な浮線文浅鉢が含まれるが、複段構成の流麗な
三分岐ハンガー状浮線文が主体となり、それをメルクマールとすることができる。古い要素を
持つ浅鉢として第98図1、2が存在するが、当遺跡においては分離する必然性がなく、伴う可
能性が強いと判断した。両者とも様相として横浜市杉田遺跡の資料に近いものがあるのに対し
て、ハンガー状浮線文を持つ個体には福島県会津高田町下谷ヶ地⁹出土土器群に非常に
近いものが多い。あるいは系譜の上では出自の異なるものが共存しているのかも知れない。池
花南遺跡で前述の浅鉢に伴う土器群は先に詳述したとおりであるが、条痕施文の土器が伴出し
ないことに注意したい。またそれと関連するが、甕、深鉢は、浅鉢程に中部高地や東海～西関
東との関連性が高くなく、北関東～南東北と共通した様相を呈している。池花南遺跡と同じ段
階か若干先行すると思われる資料に、千葉市房地遺跡出土土器群¹⁰がある。量的にはさほど多く
ないらしいが、良好な資料である。所謂千網式土器（藺田芳雄の言う千網Ⅰ式）は、房総では
今のところこの2遺跡の土器群が典型的なものと言える。厳密に言えば、千網式土器の様式内
容は今日まで明確に規定されたことがなく、通俗的には浮線文＝千網式と捉えられがちである。
千網式については現在飯島義雄と外山和夫が再検討を行っており¹¹、千網式という用語は飯島ら
の成果が出るまで積極的な使用を控えるべきであると考ええる。関東地方では桐生市千網谷戸遺
跡を除いて、全般にこの段階の良好な遺跡が少ない。中では埼玉県嵐山町花見堂遺跡で房地遺
跡の段階に対比される浮線文土器群を出土している。この資料は池花南遺跡の直前段階に置く
ことができるかも知れない。これらの遺跡と離山遺跡は、微妙な時間的ずれがあったとしても、
ほぼ相前後する時期の所産と考えることができる。

なお内黒田遺跡群周辺では物井地区御山遺跡¹²で大洞A式並行期の土器が断片的に出土してい
る。うち浅鉢の一個体は長野県大町市一津遺跡¹²鉢E1にきわめて類似し、浮線文からすると池
花南遺跡第98図7に先行する資料であると考えることができる。

池花南遺跡に後続する遺跡はかなり増加する。四街道市では物井地区御山遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点

があり、成田市荒海貝塚¹³、同市殿台遺跡¹⁴もこの段階に開始され则认为てよい。また上総では市原市武士遺跡¹⁵がある。他地方との編年対比では、大洞 A' 式期前半、氷 I 式中段階以降ということになるが、この段階は遺跡の個性が大きい点を指摘することができる。それは端的に言えば、中部地方、氷 I 式土器の影響の強弱による差異と言える。

前記各遺跡のうち御山遺跡の土器群は、相対的に中部・東海からの影響が弱いものである。浅鉢に施される浮線文について見れば、3～4本の浮線を一単位とするレンズ状のモチーフが卓越し、杉田 D 類土器の新しい部分や新島田原遺跡¹⁶の浮線文浅鉢に共通する要素を有しているが、それらの遺跡と比較すれば口縁外帯が未発達で、同時に下位の文様帯との間の無文帯も明確になっていない。また甕、深鉢については前段階のものを継承しており、特に氷 I 式土器で主体を占める、口縁部や肩部に平行沈線を巡らせる土器の量が少ない点において大きく異なっていると言えよう。

御山遺跡に対して成田市殿台遺跡の土器群は、氷 I 式土器の影響が強く、浅鉢に施される浮線文は菱形を呈するものが多く、口縁外帯と直下無文帯が発達している。また平行沈線を有する甕、深鉢は主体的な存在となっている。全く未公表の市原市武士遺跡出土土器群についてはわずかに瞥見しただけで、現在詳細は不明であるが、ここでは氷 I 式土器そのものに近い内容を有しており、筆者の印象では駿河山王遺跡¹⁷の土器群に近いようであった。これら 3 遺跡の間に全く時期差がないとは言いきれないが、ほぼ同じ段階と考えることができる土器群のこのような差は遺跡の立地条件に左右されたものと考えられないだろうか。すなわち御山遺跡は下総台地の内陸部に位置するのに対し、殿台遺跡は利根川に近く、武士遺跡は東京湾に近い。殿台遺跡では利根川水系を通じて北関東から中部高地、武士遺跡は海上の道を通じて西関東から東海地方とそれぞれ交流を取りやすい。したがってそれぞれ別ルートで西方からの強い影響を受けた可能性も否定できまい。

この段階には組成上壺が若干増加する傾向がある。少なくとも御山遺跡ではそれが明確であった。また武士遺跡では檜王式土器（壺）が、御山遺跡では檜王式土器の可能性のある東海系条痕文土器と遠賀川系土器（在地）が出土している。この段階の西方の影響力は、氷 I 式土器を介した弥生文化の間接的な波及に外ならず、そして遺跡による様相の差異は、房総という地域総体に徐々に影響が及ぶのではなく、拠点的人的交流によって急速に浸透しつつあったことを物語るものと言えよう。

④ 荒海式土器の成立と展開

先述の御山遺跡第 I・II 地点出土土器群に後続する良好な資料が、同じ御山遺跡の第 III 地点で得られている。その土器群の特徴を端的に言えば、浮線文施文の浅鉢の著しい退潮である。それはすなわち浅鉢自体の激減であり、従来の晩期後葉における土器様式の規定如何に拘わら

ず、この段階でそれまでの土器組成が崩壊することは議論の余地がない。筆者はこの段階以降を荒海式土器と考えたい。御山遺跡で少量残存する浅鉢には、沈線を重ねてレンズ状あるいは三角形のモチーフを描くものがあり、新島田原遺跡との共通性が指摘できる。壺の一部には浮線による意匠は残るが、興味深いのは頸部に1〜2条の刻目突帯を持つ壺が存在することで、これを以て畿内第Ⅰ様式の半ばに対比させることもあながち無謀とは言えまい。甕には前段階と共通のものも含まれるが、施文率は高くなる。ここで特徴的なのは列点、特に沈線間列点の出現である。ところで当土器群には変形工字文、三角連繋文の類いが一切認められない。この土器群に対比される単純な一括資料は、県内外とも現在のところ見当たらないので明断できないが、浮線文浅鉢激減当初の段階は荒海式土器のメルクマールとされた三角連繋文はまだ出現していない可能性がある。しかし浅鉢の減少とこの直前段階を含めた壺の増加は、他の地方の弥生土器成立と見事に符合する現象であり、この背後に重要な画期を認めるべきである。荒海式土器という様式をこの段階以後に設定すべきであるという理由はまさにこの一点にある。時間的対比としてはおそらく水神平式土器成立頃に相当し、北関東地方における南大塚遺跡、沖¹⁸Ⅱ遺跡¹⁹などに並行するかやや先行することになるであろう。ただ中部高地や北関東地方あるいは西関東地方と異なり、東海系条痕土器の系譜上にある壺を組成せず、また壺の比率は未だ相対的に低いところに留まっており、はたして他地方と同様にこの段階を弥生土器の成立とすべきかどうかはさらに今後検討を要する。

同じ御山遺跡の第Ⅳ地点ではさらに異なった土器群が出土している。地点間に若干の混在を含むと思われるが、この地点だけに特徴的な事象は、三角文、菱形文、刺突充填などの出現である。全体として小片が多いため組成が不明瞭であるが、前段階に位置すると思われる第Ⅲ地点の土器群と大きく変わることはないであろう。問題は御山遺跡では三角文や菱形文の出現が唐突に見えることである。しかしやはりこの土器群の対比資料もきわめて不足していて、かかる変遷の予想を検証することは難しい。四街道市で荒海式土器を出土した遺跡は他に池花遺跡がある。量的には僅少であったが、条痕施文の土器を主体にした土器群で、類似性から市原市唐沢遺跡出土資料²⁰に対比され、荒海期でもその末期に位置するであろうことは既に本文中で述べた。予見的には御山遺跡第Ⅳ地点よりも新しい段階と考える。しかし唐沢遺跡出土資料も一括性の検証はなされておらず、問題がある。

そもそも荒海式土器を出土する遺跡は、荒海貝塚を除けば断片的な資料が非常に多く、山武姥山貝塚や余山貝塚など晩期の拠点的な遺跡ではある程度まとまった資料が得られていても、前後の時期との混在資料であって、客観的に分離することはできない。荒海貝塚の報告資料でもある程度その傾向はあろう。荒海式土器とされる土器群の中で、上下幅の狭い菱形文が多段にわたって施文される土器を特徴的に含む資料がある。先述の唐沢遺跡を始め、山田町高宮台遺跡²¹、佐倉市大崎台遺跡C地区²²、東金市道庭遺跡²³、成田市殿台遺跡、茨城県殿内遺跡などに認

められ、新しい段階の特徴であると理解されている。道庭遺跡では水神平式土器が伴っているようであり、高宮台遺跡では須和田式土器に類似した破片が含まれ、それはそれで妥当性のある見識であると思われるが、はたしてそれらがいかなる土器と組成するかは今のところ明らかではない。また荒海貝塚で注視された雑書文施文の甕も、当の荒海貝塚以外ではその存在が不明瞭である。先に池花南遺跡で出土した弥生土器中のある種の甕に、雑書文甕の系譜を持つと予想しており、それが正しければやはり雑書文施文の甕は荒海式土器でも最末期に措かれるであろうが、事実はどうか。いずれにしる荒海式土器の展開とその次の段階への移行は、多くの遺跡それぞれで複雑な様相を示し、今後複数の良好な一括性を持つ資料が得られない限り整然とした理解は困難であろう。

⑤弥生土器の成立をどこに求めるか

これまで概観してきた中で土器群の変化の画期を求めると、第一は浮線文土器群の成立であり、第二は浮線文浅鉢の組成主体からの欠落と壺の若干の増加である。またさらに次段階の画期としては須和田式土器成立における壺の飛躍的増加である。浮線文土器群の成立時には、中部高地において石器組成の一大変化が知られ、農耕への傾斜が強まることが確認されている。また荒海式土器段階での浅鉢の欠落時は、東日本一般の弥生土器の成立と合致した時期であろう。しかし他地方と比較した場合、壺の組成主体へ参画が不充分であると言える。これは再葬墓の成立時期とも符合した現象であると考えられ、この点については今後も議論を重ねる必要がある。筆者としても力量の限界から現段階では以上のような中途半端な言及しかできないが、今後さらに考究を重ねるべく努力したい。

註1 資料実見

- 『千葉県文化財センター年報 No.10』(財)千葉県文化財センター 1986
- 『千葉県文化財センター年報 No.11』(財)千葉県文化財センター 1987
- 2 設楽博己「中部地方における弥生土器の成立」『信濃』34-4 1982
- 3 寺門義範『千葉県夷隅郡大多喜町堀之内上の台遺跡』夷隅郡教育委員会 1979
- 4 資料実見
- 『千葉県文化財センター年報 No.14』(財)千葉県文化財センター 1989
- 5 杉原莊介・戸沢充則「神奈川県杉田および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2-1 1963
- 6 松本市教育委員会『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』1972
- 7 長野県教育委員会『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―上伊那郡辰野町(その1)』1973
- 8 杉原莊介・戸沢充則・小林三郎「茨城県・殿内(浮島)における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』4-3 1969
- 9 芳賀英一「下谷ヶ地平B・C遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会 1986

- 10 千葉市教育委員会 田中英世氏のご教示による
- 11 飯島義雄「千網式土器の再検討（１）」『群馬県立歴史博物館紀要』 5 1984
外山和夫・飯島義雄「千網式土器の再検討（２）」『群馬県立歴史博物館調査報告書』 4 1988
外山和夫・飯島義雄「千網式土器の再検討（３）」『群馬県立歴史博物館調査報告書』 5 1989
- 12 設楽博己・他『一津』 大町市教育委員会 1990
- 13 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚（第一次調査）」『学術研究』 23 1974
西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）」『学術研究』 24 1975
- 14 寺内博之・喜多圭介・他『成田市郷部北遺跡群調査概要』 成田市郷部北遺跡調査会 1984
- 15 資料実見
『千葉県文化財センター年報 No.13』（財）千葉県文化財センター 1989
- 16 杉原荘介・大塚初重・小林三郎「東京都（新島）田原遺跡における縄文・弥生時代の遺跡」『考古学集刊』
3-3 1967
- 17 笹津海祥・他『駿河山王』 富士川町教育委員会 1975
- 18 大塚昌彦「南大塚遺跡」『群馬県史 資料編2』 群馬県 1986
- 19 設楽博己「関東地方の〈条痕文系〉土器」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題 資料編1』
愛知考古学談話会 1985
- 20 木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
- 21 青木幸一・他『高宮台遺跡』 高宮台遺跡調査会 1985
- 22 柿沼修平・他『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1987
- 23 調査担当の小高春雄氏ご教示および資料実見